9月29日　　ヨハネによる福音書11章1～16節

「全ては神様の御計画の中」

今日の個所でイエス様は、ラザロが死にそうだと言われているにも関わらず、すぐさま動こうとはしませんでした。人間の目から見れば不可解な様子ですが、そこにも神様のご計画が示されていたようです。ラザロの病気は死で終わるのではなく、その先の生き返りによってようやく終わることになります。その時が満ちるためには、イエス様はベタニアに行く日をしばらく遅らせ、マリアとマルタが助けを求めてから二日間動きませんでした。

今日の最後の部分でイエス様は、死んでいるラザロをよみがえらせに行くのですが、弟子たちはそれを理解していない様子でした。ここでイエス様が「わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった」と言っているのは、死んですぐの人間を生き返らせる医者のような力ではなく、「確実に死んでいるラザロを生き返らせる」神様の業によって。イエス様の栄光と、実際に神様の力が働いたことを思い知らせることになります。

このように、人間の命すらも用いながら、神様はそのご計画を実現させていきます。ただ、神様は私たち人間を道具のように扱うような方ではなく、人間を救いに導き愛を注ぐ、慈愛の神様であります。そうであるからこそ、私たちはそのすべての業の向こうに「神様の御心」を探し続けるのです。

この日本には、大きな災害が度々襲いかかってきます。「どうしてこんなことが起きるのか」としか言いようがないその出来事を、ただ「天からの災害」として嘆くだけで終わるのか、それとも「神様の業が現れるため」と前向きに受け止めて、その神様の業を示すために私たちが何かをなすのか。それが被災者以外のすべての人には問われているのだと思います。どのような出来事にも神様の御心を考えながら、「イエス様ならこうしただろう」と考えながら行動することが、私たちには求められているのです。

そして、それと同時に、全てが神様の計画の中であるということは、そのすべての責任は神様が担ってくれているということでもあります。大きな災害も、戦争や貧困も、もちろん人間に大きな責任がある場合も多いのでしょうが、「そのような形に人間を作った」こと自体は神様が責任を負ってくれる部分だと思います。だからこそ私たちは誰かに恨みを抱いたとしてもそれを本人にぶつけるのではなく、私たち自身は柔和で穏やかに生き続け、誰かに対しては優しい言葉を語りかけ続け、苦しみや不満を「神様に訴え続ける」のです。ヨブ記のヨブのように、「どうしてこんなことになってしまっているのか」と訴え続け、しかしそこに神様の意思を探し続ける、それが私たちにできる、より良い信仰の歩み方なのだと思います。

今日の個所では、私たちにとって大きな悲劇の「死」というものが、神様に用いられてイエス様のことを信じる証しとして用いられていました。植物の種が地に落ちて芽吹き、やがて新たな命となるように、私たちの死もまた決して悲劇だけで終わるものではありません。死とは悲劇でもありますが、復活の始まりでもあり、そして私たちが生き切ったその人生によって神様を証しすることにもなるのです。その私たちの生き方すべてを、神様が責任をもって担ってくださっている、その神様に信頼をして、イエス様に導かれて、すべての時間を共に歩み続けていきましょう。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 11 章 1～16 節

- 1:ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された。それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまずくことはない。この世の光を見ているからだ。しかし、夜歩けば、つまずく。その人の内に光がないからである。」こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである。さあ、彼のところへ行こう。」すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。